
可愛さ余って憎さ100倍 2

ゆや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可愛さ余って憎さ100倍 2

【コード】

N5937R

【作者名】

ゆち

【あらすじ】

聖視点となっております。

(前書き)

聖視線

彼女との出会いは居酒屋だった。

例の如く飲んだくれていた彼女、しろのみつこ白野蜜子に捕まった僕は彼女の愚痴をずーっと聞いていた。

「…私って、そんなに色気ないかなー…？」

「……………え？」

ハッキリ言って、ない。これは断言できる。彼女は社内でも有名な酒癖の持ち主で、アルコールがちよつとでも入るとエロ親父化するらしい。

聞いた話だったのだが、目の当りにした今、十分過ぎるほど納得した自分が居た。

「だーって…もう今年で27歳なのにまだ処女って…教会のシスター出来る」

こんな酒乱なシスターが居たら神父が困るだろ。とどこかの誰かが彼女にツッコミをした気がした。多分自分の心の声が幻聴を生んだのだろう。

「あまり飲みすぎると、明日の仕事に障りますから帰りましょうか。送っていくんで、立ってください」

「んー…」

目がトロンとしている彼女は今にも寝てしまいそうだ。急いで会計を済まして、適当にタクシーを拾い、寝そうになる彼女を揺り起こしながら、道順を聞いてやっと彼女が住むアパートに着いた。

彼女のカバンから鍵を取り、玄関のドアを開けば、思いのほか部屋は綺麗に片付いていた。

（もつと小汚い部屋を想像してた…）

綺麗に整頓された布団の上に彼女を寝ころばせ、メイクを落としてスーツを脱がせてハンガーに掛ける。

それから、ベッドに寝転がる彼女をじっくりと眺める。

僕好みの太さの太ももに、小ぶりの胸。ウエストには興味はないが標準体型と言える。なんといってもガーターベルトがなんとなく色気が醸し出されている気がする。

ガーターベルトと言えば、普通の使い道としては、ストッキングが合わない女性向けの物なのだが、一種のプレイでこういうのが好きな奴もいる。残念ながら僕はそっちの趣味はない。

「……見れば見るほど、聞けば聞くほど、あの人に似ている……」

あの人、とは僕の母親の事だ。母も変わった人ではあったが、父曰く監禁してしまう程に可愛くて、一時も離れたくないとの事だ。

なんとなく芽生え始めてきたこの感情はきつと父親譲りなのだろう。父も、変人が好きだった。きつと彼女の事も気に入る。間違いない。そうとなれば、こんな時の為に貯めて置いた小型隠しカメラと盗聴器を色んな所に取り付け、最後にもう一度白野蜜子を見る。スヤスヤと子供のように眠る彼女は、やはり色気とは無縁だった。

あれから（隠しカメラと盗聴器を取り付けた日から）数日が過ぎた。カメラ越しに見る蜜子を、日に日に可愛くて仕方なく思う日が続いた。

風呂場で転んだ時の蜜子の映像は官能的で、ナイスアングルで撮影された映像はすぐさま保存した。

それからいろんな蜜子の声をかき集め、三日掛けて自分好みに編集して、携帯のアルバムに設定と無駄な努力をしていき（犯罪）、そ

してとうとうこの日が訪れた。

忘年会という名の飲み会にて、彼女に絡まれた。エロ親父と化した彼女は非常に可愛かった。父が以前言っていた。「好きになればどんな彼女も可愛く思える。それが恋の病だ」と。はつきり言っている意味がまるでわからなかった。目の前で道端でつばを吐いたり、食べ物で遊んだり、ゴミを外でポイ捨てしてたりするモラルのない人間はどん引きだ。いくら好きでも、そんなところ見れば一発で目が覚めるに決まっている。そう思っていた。蜜子は酒が入らなければモラルのある人間だし、親父だけ（断言）僕はそんな蜜子を愛していた。「なるほどこれが恋の病か」と納得できるようになるまで時間は掛からなかった。

とにかくお持ち帰りした後は、思う存分蜜子を味わい、婚姻届の書類も提出してからは幸福な時間を過ごした。

のだが、なぜか蜜子は女とばかり仲が良い。むしろ僕の相手をしてくれない。

「蜜子！」

「あ、と…ごめん。呼ばれちゃった」

「いいんです！旦那様優先してください」

一般的に見て可愛い容姿をしている女は僕を見て顔を赤らめてぺこりとお辞儀して去って行った。

「何？どうしたの？」

「どうしたの、だって？蜜子は僕でしょ。僕だけを見て、僕だけを愛してくれないと皆の前でこれでもかってぐらいの、蜜子の痴態を曝してあげる」

「……………たとえば」

「昨日、僕の上で喘ぎ声を出しながら「もっとちょうだい」って泣いて媚びてきた事とか、」

「そんな事してない！一方的な攻め立てでしょ！」

「この間もフェラしてる途中にイっちゃったり、」

「ちよっ…!!?なんで知って…っ！」

「僕が蜜子の事で知らない事なんてないし」

「ごめん！ごめんなさい！！」

顔を赤らめて謝ってくる蜜子に欲情して、使われていない会議室で、蜜子を美味しくいただいた。

「ねえ、蜜子。僕は君の事が可愛くて可愛くて、愛しくて堪らないから僕以外をその目に映してほしくないんだ。だから、仕事辞めてね」

「…っや…!!」

ガンガン攻め立てて、いった蜜子の中に白濁液を放出して、ゲツタリとした蜜子に深いキスを送る。

「……………逃がしてあげなくてごめんね。でも、逃がす気もないから」

END .

後日談

「次期社長様はよくアイツと結婚しようと思ったよなー」

「俺だったら無理」

「俺も」

「忘年会の時、指笛鳴らして見送ってからすぐに叫んだよな、俺ら」

「部長も酔いが一発で覚めたらしいぞ」

「女子共は、殺気立ってたな」

「もうしょうがない。次期社長様を取られたんだからな」

「優良株だったしな」

「…ていうか、お前白野抱けるか？」

「……………」

この後、この場に居た男達は声を揃えて「無理」と答えた。

END .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5937r/>

可愛さ余って憎さ100倍 2

2011年5月26日12時16分発行